

## サー・トマス・ブラウン著

## ハイドリオタファイア（その二）

## 第四章

キリスト教徒は遺骸に細心の注意を払い、野蛮な最期を回避すべく文明的な儀式を執り行なうことで、死の醜さを巧みに取り繕ってきた。また、復活により全てが元通りになると考えていながらも、埋葬について一切顧みなかったわけではなかった。神の祭壇で焼かれた生贄の灰が祭司によって丁寧に運び出され、清らかな野に置かれたことや、肉体がキリストの仮の宿であり、聖霊の宮であると見做されていたことから分かるように、彼らは全てを魂という存在の持つ力に託していたのではなかったからである。だからこそ、彼らの葬儀は長い礼拝と極めて荘厳な雰囲気によって締めくくられていたのだが、とりわけあらゆる点において、ギリシャ人の祈りが最も感情のこもった厳かなものであろう。

キリスト教徒が創意を凝らしたのは、主として、来世への希望を語り復活を暗示する儀式に對してであった。古の異教徒でさえ、魂が不滅であり、死後も何らかのものが存在すると思えなかったわけ

## 生田省悟・宮本正秀 訳

ではない。さもなくば、彼らの持つ儀式、慣習、行為、あるいは表現には、彼ら自身の見解と矛盾するものが含まれていたことにならう。プリニウスが嘲りを込めて記したように、デモクリトスは崇高な地点に達し、復活の思想に似た考えを抱いたという。あるいは、ポリキュリデースのことは以上に明確な言い方があり得ようか。また、『伝道の書』の一節と同じ内容をルクレーティウスから期待する者がいるであろうか。プラトンが語る以前に、魂は既にホメーロスにおいて翼を持ち、落下することなく、肉体を離れ死者の住む場所へ飛び立つとされている。ホメーロスはまた、デーマスとソーマの、即ち魂と結ばれた肉体と魂から切り離された肉体の明瞭な区別を見て取つてもいた。ヘーラクレスに関して、アルクメーネーより生じた部分は滅びたが、ユピテルより生じた部分は不滅であると述べたルーキアーノスは、冗談めかしながらも大いに真実を語っている。ソークラテースは友人たちの手によって埋葬されることに満ちたが、それには、友人たちがソークラテースその人を埋葬するのではないと考えることが条件とされていた。彼は自らの不滅の部分にのみ留意し、火葬されようと埋葬されようとこだわらなかつた

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

のだ。ディオゲネースが埋葬を軽蔑した<sup>(12)</sup>のも、ソークラテースと同様の思いによっていたのかもしれない。彼も、魂が滅び得ないことに満足していたからこそ、肉体が埋葬されることに無頓着になつていたのであろう。ストア派の人々は、賢者の魂が月の辺りに居住すると考えていたので、遺骸を地下に安置することには殆ど関心を示さなかつたらしい。一方、ピタゴラス学派の人々や輪廻転生を信じる哲学者たちは、幾度となく葬られることになるからと、自らの埋葬に大いに関心を寄せていた。プラトン主義者たちは、遺灰が非常に長い期間を経て元の形に回帰するという途方もない予測を立ててはいたものの、墓に対してそれなりの配慮を払うことを厭わなかつた。

人が最も理性を失うのは、宗教においてであつた。宗教にあつては、石や布切れさえ殉教者となるのである。ある人にとつての宗教が他の人々には狂気と映りかねない以上、古い葬儀に関する説明の類は厳格な読者を求めるものにはなり得ない。薪に顔を背けながら嫌々火を点けたことは、それが気の進まぬ務めであつたことを如実に物語っている。一方、遺骨を葡萄酒や牛乳で洗つたこと、母親が遺骨を亜麻布に包み、育み養う最初の場であるその胸に抱いて乾かした<sup>(13)</sup>こと、あるいは、薪に火を点ける前に、希望を寄せる場であり起源でもある天に向けて亡骸の目を開かせたことは、決して適切さを欠いた儀式ではなかつた。また、参列者によつて三度唱和された告別のことばも非常に厳かなものであつた。この慣習に倣い、キリスト教徒も埋葬される亡骸に少なくとも三度土を投げ掛けなければならぬと考へたのであろう。墓にまき散らす花として、ローマ人

はバラを、ギリシャ人はアマラントや銀梅花を好んだ。火葬用の薪として彼らの選んだ香りの良い木材、殊にイトスギ、モミ、カラマツ、イチイなどは、不死の希望を無言のうちに表わしていた。柩を月桂樹で飾つたキリスト教徒は、さらに優美な表象を見出している。月桂樹は死んだように見えても根から回復し、乾燥し干からびた葉も再び緑を取り戻すからである(思い違いでなければ、ハリエニシダにも同様のことが見られるはずだ)。教会墓地にイチイを植えることが、古代の弔いの儀式を起源とするのか、あるいは常緑樹であることから復活の象徴と考へられていたためのかは、推測の余地があろう。

さまざまな旋律によつて死者の友人の悲しみをかき立てたり静めたりしようと、音楽が用いられたこともあつた。だが、音楽が密にかつ象徴的に暗示したのは、魂の持つ調和的な性質であつた。肉体から解き放たれた魂は、もともと天より降りてきたものであるからには、再び元の場所に立ち帰り、かつてのように天上の調べを樂しむと考へられたのである。古の人々の辿つたところによれば、魂は蟹座の近くを通過して地上に降り、山羊座の近くを通過して天に昇つた<sup>(15)</sup>という。

齒の生える以前の子供が火葬されることはなかつた。その遺体が火に対しては余りに弱い小片に過ぎず、薪が燃え尽きた後に、その柔らかな骨は原形を殆ど留めないことが危惧されたからであつた。死者を苛んだ炎が辛い思い出として生々しく残つていたために、火葬の後、数日間の家で火を灯さなかつた。だが、悲嘆に暮れながらも、余りに深い悲しみは死者の靈を悩ませるといふ俗信<sup>(16)</sup>のおかげ

で、人々は嘆き過ぎる事態を幸いにも抑えることが出来た。

背中を下にした仰向けの姿勢で亡骸を埋葬したのは、深い眠りに似つかわしいものであり、通常はこのような形で死を迎えることにもなる。これは、誕生する際の普通の姿勢とは反対で、子宮という不安定な場に浮かんでいるときの状態とも異なっている。デイオゲネースのように、墓の中に俯せて納められることを望んだ変わり者もいた。<sup>(17)</sup>キリスト教徒の中には、休息の姿勢を拒み、仰向けにも俯せにもならず、直立したまま埋葬されることを選んだ者もいた。<sup>(18)</sup>

死者を足から先にこの世から運び出したというのは、理屈に合わないことではない。というのも、それが誕生の際の姿勢、即ちこの世に初めて現われたときは正反対だからである。また、この慣習は、人生に別れを告げるに際し、二度と再びこの世を見ないようにするとという考えにも適っていた。一方、イスラム教徒は喜びに満ちた人生に再び戻りたいと考えているので、頭を先にして、自分の家の方を見ながら運び出されることになる。

亡くなる人が目を閉じたのは、それが最初に死ぬ箇所であり、死という悲しい結末を一番先に表わすものだからである。だが、死を迎えつつある友や死んでしまった友を目覚めさせようと、あるいは生き返らせようと、繰り返し呼びかけた愛情は空しいものであった。人々が、羽根や鏡を用いたりとか、死者の目には像が映らないことを確かめるとかいった、死の正確な判定法を知らなかったわけではあるまい。亡くなって間もない、未だ温もりの残る遺体では正確な判断が出来かねたといえ、四、五日を経た場合、死の判定を免れることは殆どあり得ないのである。<sup>(19)</sup>

ハイドリオタファイア（その二）（生田省悟・宮本正秀）

いまわの際にある友人の最後の吐息を吸い込んだというのは、明らかに医学に基づく習慣ではなかった。それは、魂が口から抜け出るといふ根拠のない見解に従ったものであり、ある肉体の魂が別の肉体に入り込むというピタゴラス学派の考えを愚かにも踏まえていた行為に他ならない。<sup>(20)</sup>人々は、その抜け出る魂を自らのものにしたいと願っていたのであった。

火葬の薪に油を注いだというのは、点火を容易にすることを意図していた限りにおいて、許容出来る慣習である。だが、素早く迅速に燃えることに吉兆を見出したり、火葬という務めの成就を願って風に生贄を捧げたりしたのは、取るに足らぬ迷信に過ぎなかった。

葬列に道化が加わり、故人の話し振りや物腰、身振りなどを真似たのは、<sup>(21)</sup>厳粛な場には軽薄過ぎることで、墓前での弔辞や悲しみに満ちた儀式にはそぐわなかった。

死者と共に硬貨を埋め、三途の川の渡し守への料金としたのは、全く愚かな行為であった。だが、身分の高い人物の骨壺に硬貨を入れたという古の慣習や、立派な建造物の土台にメダルを埋めるといふ現在のヨーロッパで見られる行為は、出来事、人物、あるいはその年代に関する歴史的な発見をもたらすという意味で優れた方法であり、後世の人々もそれを賞賛するに違いない。

特定の人物を埋葬や火葬から排除したという、墓にまつわる古の法の詳細を検討する余裕はない。だが、そのような法に即してみれば、私たちの許にある遺骨が星に撃たれたり天からの炎で焼かれたりした人物のものではないことが分かる。即ち、国家に対する反逆者や自殺者、また神聖冒瀆の罪を犯した者の遺骨ではないのである。

そのような者たちは、古くは大地にふさわしくないとされ、地獄のタルタロスやプルートの底無しの淵に落とされ、罪が贖われることはないと考えられていた。

葬儀に関して多くの不明な慣習があった一方で、死者の受ける処遇や行く末についても、相矛盾し意味の曖昧な風習や仮説、見解などがあつた。より多くの脂肪分から成つていて点火しやすいことから、薪が燃えるのに好都合だとして、一人の女性の遺体を八ないし十人の男の遺体に加えたのは、果たして理に適つた慣習であつたろうか。あるいは(プルートの支配する冥界の掟では、寒さがその責め苦の大半をなすというが)、火葬されなかつたために地獄で耐え難い寒さに苦しんだという、ペリアンドロスの妻の嘆きを受け入れていいものであろうか。共に、幾許かの疑問を差し挟まざるを得ない。

勇者や男の霊に先だつて、女の亡霊がウリッセースの前に現われるのはなぜか。(地上では盲目でありながら、冥界では誰よりも目が利いた) テイレシアースのサイキ、即ち魂が男性であるのはなぜか。<sup>24</sup>死者は極楽の草地で不凋花を食べるとされているのに、<sup>25</sup>葬儀の際の食事にはなぜ、卵、豆、セロリ、レタスが供されるのか。また、いかなる生贄も受け入れられず、死の契約から贖われることなど決してないのに、人々はなぜモルタを女神と崇め、<sup>26</sup>聞く耳を持たない神々を崇拜したのか。何らかの疑念を抱くことは免れ得ない。

ホメーロスの語る古典の冥界では、死者は外見では生者と同じでありながら、人の命を宿すという血を飲まない限り、話すことも、予言することも、生者と交わることも出来ない<sup>27</sup>とされている。それ

ゆえ、ペーネロペーの求婚者たちの魂はメルクリウスに導かれながらコウモリのように鳴いていたし、<sup>28</sup>ヘーラクレスに従つた者たちは鳥の群れのようにただ喚くのみであつたという。<sup>29</sup>

死者の霊は過去と未来のことを知つていながら、現在については何も知らない<sup>30</sup>とされている。アガ멤ノーンはウリッセースの身を起こることを予言しながら、<sup>31</sup>実の息子の境遇が分からず、問いを發している。ホメーロスにおいて、亡霊たちは剣を恐れるが、<sup>32</sup>ウエルギリウスにおいては、<sup>33</sup>霊の纏う薄い衣は武器の威力の及ぶところではないと、シビラがアイネイアースに語っている。ローマ人の考えでは、死者の霊が肉体と同時に敵意をも脱ぎ捨てるからには、カエサルとポンペイウスも冥界で和睦することになるが、<sup>34</sup>ホメーロスにあつては、<sup>35</sup>アイアースはウリッセースと話を交わそうとはしていない。ウエルギリウスの描くデーイポボスの亡霊はこの上なく無残であるが、<sup>36</sup>ホメーロスでは、傷ついた亡霊たちの中にも全き姿のまま<sup>37</sup>にいる者を見て取ることが出来る。

ルーキアアーンズにおいて、カローンは死者に囲まれた己の境遇を称えている。とすれば、生きて死を軽蔑したアクレウスの、<sup>38</sup>死者の皇帝となるよりはむしろ農夫の奴隷になりたい<sup>39</sup>と云ふことは、果たして毅然としたものであろうか。ヘーラクレスの魂が天にありながら、冥界にもある<sup>40</sup>というのはどういうことか。ユリウス・カエサル<sup>41</sup>の魂が彗星にありながら、<sup>42</sup>冥界のアイネイアースの見る<sup>43</sup>ところとなつて<sup>44</sup>いるのはなぜか。肉体と魂、そしてその両者の影ないし似姿<sup>45</sup>といった古の分類法に従えば、亡霊は天上の館に受け入れられた魂の影や幻影に過ぎない<sup>46</sup>ということであろうか。古代の諸説にとつ

ては、死後の詳細は全く不明であつたに違いない。キリスト教の神学はその点に結論をあたえてはいるものの、意見が錯綜している。この世の様子について、子宮の中で交わされる二人の胎児の会話は、あの世にまつわる私たちの無知をみごとに表わしていると言えるかもしれない。あの世に關しては、私たちはプラトンの洞窟で論じ合っているようなもので、哲学者といえども胎児同然なのではあるまいか。

ダンテの物語る地獄には数多くの哲学者が登場しているが、ピタゴラスをそこに見出すことは出来ない。<sup>(44)</sup> 私たちは地獄でプラトンやソークラテースと出会うものの、カトーの姿を初めて目にするのはその上の煉獄においてである。<sup>(45)</sup> 地獄に群がる哲学者の中では、柴土に迎え入れられなかったとはいへ、真摯な人物とされてゐるエピクローロスこそ最も注目すべきであろう。彼こそは不死に勵ましを求めることなく生を軽蔑したのであり、死後は無になることを受け入れつつ、最大の恐怖である死に対しても怖じ気づくことはなかったのである。

この世の至福と同様に、あの世の幸福が正確に理解されたならば、この世で生きることが責め苦そのものと考えられるであろう。また、この世の後には何もないと考へる者にとつて、死は単なる死以上のものを意味するに違いない。敢えて無となり、再び混沌へ戻らうとする者たちの不敵さに私たちは驚嘆を覚えるのである。死後に訪れるべき良い状態を期待しないまま死を嘲つたほどの者が、そのような状態の到来を理解することが出来たならば、必ずやこの世での生を軽んじたであろう。だからこそ、私たちは、キリスト教が人を臆

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

病にすると述べたマキャヴェリ<sup>(46)</sup>を賞賛してはならないのだ。マキャヴェリによれば、忍耐と謙讓という卑しむべき徳が、滅びるのは肉体のみであるとの確信の下に、異教徒の教義では高められていたはずの人間の精神を貶めてしまったのだという。だが、キリスト教こそ、人が大胆にも死を試み、死の根拠を問い、あるいは際限なく死について推論し続けることを抑制したのだ。無鉄砲な人々は往々にして、常軌を逸した途方もない振る舞いに及び兼ねないからである。

また、古の殉教者は人生の窮地にあつて死を軽蔑し、あるいは老い衰えてからの殉教に際し、恐らく人生の多くの月日を失うこともなく、殆ど生きる意義もなくなった果てに生に別れを告げていた。だからといって、彼らの勇気を軽視することは出来ない。(過ぎ去つた長い時間に比べれば、来るべき僅かな時間には意味が見出せないといふことのみならず) 彼らは、老齡という、人を臆病にする事態から少なからぬ不利益を被つており、若者に見られる大胆で勇敢な思ひや血氣盛んな年月を失つていたからである。だが、肉体に対する憎悪から死を軽蔑したところで、幸福が増大するものではない。天上でオーケストラ席<sup>(47)</sup>、即ち貴賓席に座を占めるのは、炎の中で震える手を掲げ、人間としての弱さを見せながら栄光を求めた者なのである。

ところで、ダンテにおいてエピクロースは、魂の不滅を否定した者を閉じ込めるべき墓があるという深い地獄に横たわつてゐる。<sup>(48)</sup> だが、彼は自らのことば以上に正しく生き、自らの原則に誤りがあつたとはいへ、もつともらしい格言を残した哲学者たちに優る生涯を送つた。この有徳の異教徒が、なぜ地獄の奥底(少なくとも、あの

真理を信じ、あるいは知りながら、行為や会話においてそれを永遠に否定したキリスト教徒に相いまみえることが出来ないほどの深さである)に横たわる定めにあつたのかというのは、訴え続けるには悲し過ぎる問ではないか。

異教徒の知識の全てないし大半は、死後の事態に関するさまざまな見解に依拠していたが、それは鵜呑みにされ従順に信じられていたために、誤った概念や儀式、ことばなどを生み出し、キリスト教徒の哀れみ嘲るところとなつた。人が行く末について理性に基づく以外に殆ど語り得ず、そのために高貴な精神の持ち主がしばしば懷疑を抱きつつ亡くなつたり、憂鬱な最期を迎えたりしたような不幸な時代に生きていない者は幸いである。魂の不滅を望みつつ、ソークラテースは冷たい毒を前にして、自らの揺れ動く心を熱くしたのであつた。<sup>(50)</sup>カトーは自らにとどめの一撃を加える前に、不死を説くプラトンを読みながら一夜を過ごし、あの勇敢な試みを行なう際の手の震えを抑えたといふ。<sup>(51)</sup>

命が終わりに達し、その先には何もなく、人生はひたすらその無を目指して進んできたに過ぎず、それを否定したところで空しいだけだと告げることは、憂鬱が人に投げつける最も重い石である。だが、人生がこの通りに終わりを告げるのでないとすれば、無を期待し求めるなどというのは、人の本性に巢食う誤謬だということになりはしないか。魂の不滅に懷疑を抱く者たちは、自らの成り立ちをもたらしした神の正義に異を唱え、アダムが墜ちたことに満足を見えただであらう。アダム以外に起源があることを知らず、自らについてはさらに無知である彼らは、その本性を嘆くような思いを抱くこと

なく、自らの立場を静かに受入れ、劣つた被造物としての幸福を享受していたに違いない。その成り立ちからして永遠を願うことはほど遠く、死後のより良き存在を認識するなど思いも及ばなかつた者には、神の知恵により、それなりの充足感が必然的にもたらされたのであつた。しかしながら、私たちを形成する優れた要素、即ち私たち自身にも隠された部分である魂は、この世のいかなる至福からも得心のいく満足を与えられないものではない。しかも、この魂は究極において、私たちが現在の私たち以上の存在であることを教えてくれると共に、この世での生が死をもって完結するという予断を消し去ってくれるに違いない。

## 第五章

さて、これらの遺骨は、既にメトセラ<sup>(1)</sup>の生涯よりも長い時を過ごしている。しかも、地下一ヤードの深さで薄い粘土の壁に囲まれながら、地上の堅固で立派な外観を誇るどのような建造物にもまして長い年月に耐え、三人の征服者が太鼓を打ち鳴らし地面を踏み鳴らすのをよそに、静かに安らつてきたのである。いかなる王侯が、自らの遺骸にこれほどの長い年月を約束出来るであらうか。あるいは、こう申し渡すことを喜びとしない王侯がいるであらうか。

骨となりしときは、かくのごとく安置せよ<sup>(3)</sup>

古き事物を廃れさせ、万物を塵に変える術を持ちながら、時は、こ

うしたささやかな遺物には手を付けようとしなかった。私たちは徒らに、開けた人目につく場所に安置され、後世に知られることを望もうとする。だが、これらの遺骨にとつては、人に知られないことが長く残るための手段であり、忘れ去られることが防御となつたのであつた。もしも、これらの遺骨の主が暴徒の手にかかり、骨壺に投げ入れられたのであれば、それは注目に値するものとなる。古の哲学者の中には、そのようにして肉体から引き離れた魂こそがこの上なく清らかで、かつ肉体に対してひととき強い愛着を持ち続けていると考へ、それを称えた者もいたといふ。<sup>(4)</sup>ところが、当の哲学者たちの魂は、衰弱した肉体を力尽きた様子で後にし、再び結ばれたいといふ思いを微かにしか持っていなかつた。ここにある遺骨が長い生涯の果てに老いて倒れた人物のものだとしても、時の経過によつて幼児の場合と変わらない小片の様相を呈しており、識別は不可能となつている。生きている間に死が始まり、長い一生も死を長引かせることに他ならないとすれば、私たちの生涯は悲しいものである。私たちは死と共に生きており、一瞬にして死ぬのではない。メトセラが生涯に打つた脈搏の数などはアルキメデースに委ねるべき計算<sup>(5)</sup>であり、一般に用いられている数取りでは、モーセその人の一生を計算する程度のことしか出来はしない。<sup>(6)</sup>私たちの過ごした日々は、つまらない足し算と同じことで、微小なものを寄せ集めて合計すれば、確かなかなりの量となるかもしれない。だが、実は無数の断片が一個の小さな整数を成しているに過ぎず、長い生涯といへども小指一本分にすら満たないのである。<sup>(7)</sup>

人生の避けられない結末が近づいてつれて、死に一層順応してい

ハイドリオタファイア (その二) (生田省悟・宮本正秀)

くのであれば、白髪もめでたく、感覚が衰えるのも悲惨だとは言えないであらう。だが、生きるという習慣を長く続けていくうちに、私たちは死に對して顔をそむけるようになってしまふ。生を貪る思いによつて、私たちは死の慰みものとなるのだ。かくして、ダヴィデでさえ狡猾で残忍になつたし、ソロモンも最高の賢者だとは言ひ難くなつたのである。<sup>(8)</sup>とはいへ、多くの人々ははしかるべき期日を待つこともなく、余りにも早く老いていく。不幸が私たちの昼を長く引き延ばし、悲惨な境遇がアルクメーネーの夜をもたらすばかりで、時が翼を持つことはあり得ない。だが、最も悩ましいのは、自らを消し去りたいと願う者、即ち無となることを厭わないばかりか、生まれてこなければ良かったと考へる者の場合であらう。そのような事態は、自らの生きた日々よりも誕生したことそのものを呪つた、あのヨブの嘆きを凌ぐものであつた。ヨブでさえ、この世の生が墮胎されたのと同然の密やかなものに過ぎなかつたにしても、あの世に迎えられる資格が得られるほど長く生きたことに満足してゐたのだ。

セイレーンが何を歌つたかとか、女たちの間に身を隠したアキレウスがどう名乗つたかなどは、難問ではあるにせよ、推論の全く及ばないことではない。また、これらの骨壺の人物が、いつ死者の名高い国に入り、諸王や参議たちと共に眠りについたのでかについてはさまざまな答えが可能であらう。だが、これらの遺骨の主が誰であつたとか、遺灰がどのような肉体を形成してゐたのかといったことは古代研究の領域を超えた問題であり、人間の解決し得る事柄ではない。また、恐らくそれは精霊にとつても容易に答え得るところでは

なく、その土地や当人たちの守護神にでも尋ねてみるしかないであろう。遺骸に対してと同様に、その名前に對しても周到な配慮が行なわれていたならば、保存に当たってこれほど重大な過ちは犯されずにすんだに違いない。骨として形を留めたり、ミイラとして存在しただけで、長く残り続けたというのは正しくない。遺灰など、名前も人物も、また時代も性別も忘れ去られたまま、徒に残るものではなく、後世の人々にとっては、死に至る空しさを表わす象徴となり、驕慢や虚栄、あるいは狂おしい悪徳の戒めとなるばかりである。この世が永續すると考えた異教徒の虚栄は、人の野心を掻き立てていた。彼らは名前の不滅性を断ち切るアトローポスを見出すこともなく、忘却という必然に臆することもなかった。古の人々は虚栄心を満足させようと試みる際に、私たちよりも有利な立場に置かれていた。彼らは、時の歩みの中間点と思われる時期<sup>16</sup>よりも早くに活動し、既に、自らの目論みが成功した偉大な例を目の当たりにしていた。それによって、古の英雄たちは、自らの記念碑や粹を凝らした墓が減じた後も、その名を長く留めることが出来たのであった。だが、折り返し点を過ぎた時代に生きる私たちには、記憶がミイラのごとく残り続けることなど期待出来はしない。野心を抱いたところで、エリヤの予言を恐れることになろうし、たとえシャルル五世<sup>17</sup>ですら、メトセラの二倍の寿命を持ったヘクトール<sup>18</sup>ほどに長く生きることを望めはしないのである。

従って、人々の記憶に長く残りたいと願ひ、落ち着かず心を乱すことは、このように考察してみれば、殆ど時代錯誤の虚飾であり、古びた愚行の現われとしか思われぬ。長く生きた人々を私たちは

知っているが、私たち自身は名前においてすら、そのような事態を期待出来ない。ヤーヌスの一方の顔は、もう一つの顔とは無縁である。野心を抱くには遅過ぎる。世界は激しく移ろい行き、残された時間は短く、私たちの思いを達する余裕などあり得ないのだ。私たちは最後の審判の到来に備えて、日々自らの死に祈りを捧げるものである以上(長く名を残したいと願うことは、取りも直さず、私たちの望みを損なう行為に他ならない)、墓碑によって人々の記憶に留まろうとすることは、私たちの信仰とは相容れないのではないか。神のご意思は、沈み行く時代に生を定められた私たちがそのような途方もない思いを抱くことをお許しになってはいないのである。また、私たちは残された僅かばかりの未来を目の当りにすることを余儀なくされ、自ずと来世を考えるよう宿命づけられている。即ち、ピラミッドを真つ白な柱に変え、過ぎ去ったもの一切を束の間の出来事と思わせてしまふほどの長い期間に否応なく思いを馳せざるを得ないのである。

円と直線から成る文字<sup>20</sup>が全ての肉体を制し、取り囲んでいる。死を意味する直線を引かれた円が全てを飲み込み、終末をもたらすのだ。全てのものになり得ない。私たちの父祖ですら、私たちの記憶に対する解毒剤などあり得ない。私たちの父祖ですら、私たちの記憶に留まっていられるのは僅かな間に過ぎず、しかも私たち自身が後の人々に忘れ去られるであろうことを悲しげに語りかけてくるのである。墓碑が真実を伝えるのは四十年にも満たず、生い茂る木々<sup>21</sup>よそに世代は移ろい、古くからの一族といえど、その歴史はオーク三代分ほども続きはしない。グルテルスに多く見られるような簡素



な碑文によって読み継がれることも、謎めいた語句や名前の頭文字を通して永遠を願うことも、あるいは私たちのような古代愛好家によつて研究され、多くのミイラと同様に新たな名前が与えられることも、たとえそれが不変のことばによるものであろうと、永遠を求める者にとつては、陰鬱な慰めに過ぎないと言える。

自らが存在したことが後の時代知られるだけで満足し、それ以上の事柄が知られるかどうかについて無関心でいるのは、自らの星の巡りと宿命を嘲つたというカルダーノに見られた投げやりな野心と同質であろう。ヒポクラテスの患者やアレウスの愛馬と同じように、記憶にとつての防腐剤であり、存在の根幹かつ本質と云うべき功績や勲功もないまま、名前のみを歴史に残したいと願う者がいるであろうか。とはいえ、尊い行ないを果たしながら無名のままでいるのは、歴史に悪名を残すことに勝っている。名もないカナリーの女は、名の知られたヘロディアよりは幸せなのだ。また、ピラトよりもあの善良な盗人になりたいとは、誰しも望むところではないか。

だが、忘却は不公平にも闇雲に芥子を撒き散らし、永遠に残るに値するか否かの区別もせず、人の記憶と取り引きをする。ピラミッドを建造した人物を誰が哀れむであろうか。ディアナの神殿を焼き払ったヘロストラトウスの名前は残っているが、それを建立した者は殆ど忘れ去られている。時は、ハドリクス帝の愛馬の墓碑銘を留めながらも、皇帝自身の碑文を破壊している。悪名もやはり歴史に長く残るものであり、テールシテースもアガメムノーンと同様、忘れられることがないと思われるからには、名声によつて至福の度

ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

合いを測ろうとしたところで空しい限りではないか。名前の残っているのが優れた人物か否か、また、広く語り継がれてきた人物よりも、忘れられた人物でさらに注目すべき者がいるのか否かを誰が知つていようか。神による永遠の記録という恩恵に与からなかったならば、最初の人間も、最後の人間と同様に不明のままであつたに違いないし、メトセラの長い一生も、本人のみが知る年代記に過ぎなかつたかもしれない。

忘却を雇い入れる必要はない。多くの者は、あたかもこの世に存在しなかつたかのごとく、人間の記録ではなく、神の記録に見出されることで満足すべきである。最初の話は二十七の名前より成るが、それ以来、一世紀を生きた者は記録されていない。死者の数は、これから生きるであろう者の数を遥かに上回り、夜が昼を遥かに凌いでいる。両者の分点がどこであつたのかなど、誰一人として知りはない。時は刻一刻と重ねられ、一瞬といえども滞りはしない。そもそも、死は生の産婆に違いなく、異教徒でさえ、この世に生きることは死ぬことではないかと疑つたほどであつた。真つ直ぐに沈む夏至の太陽もやがて冬至になれば低い弧を描くように、私たちが闇に横たわり、遺灰が蠟燭の火に照らされるのも、それほど先の話ではあり得ない。死の兄弟である眠りが日毎私たちを訪れ、死の警告を発している。時が自らも老いながら、ながらえることなど期待するなと命じている。長い歲月など夢であり、愚かな願いに他ならない。

暗黒と光が時の歩みを二分し、記憶と手を携えた忘却が私たち人間の大半を支配している。幸せな経験は微かにしか記憶に留まらな

いし、苦悩による激しい打撃もごく短い痛みをもたらすだけでしかない。感覚が極限には耐えられないものである以上、悲しみは私たちを苦しめる一方で、自ずと消滅していく。泣いて石と化したというのは作り話<sup>37)</sup>に過ぎない。苦悩は感覚の麻痺を招き、悲惨は降りかかる雪のように瞬く間に消えていく。とはいえ、こうした麻痺状態は決して不幸な事態ではない。来るべき禍いを知らず、過ぎ去った忌まわしさを忘れることは、神が私たちの本性にお授けになられた慈悲深い備えである。それによって、私たちは、短く辛い日々を როうじて生きていけるのである。痛みから解放された感覚が、身を切るような思いに逆戻りしたり、傷の癒えないまま、繰り返しの刃に晒されることもない。古の人々の多くは、ながらえたいという願いを魂の転生を考慮することで満足させていた。それは、記憶を長く留めるための良い手段ではあるが、魂を何代にもわたって受け継いでいくという利点のある反面、生まれ変わる度に目ままいしい行ないを果たし、自らの過去の名声を享受しながらも、長くいつまでも栄光を積み重ねていかざるを得なかったのである。あるいは、無という慰めのない夜に消え入るよりは、宇宙に遍在する存在に組み込まれ、万物を構成する世界靈魂の一部となることに満足を感じた者もいたが、それは、知られざる聖なる起源に回帰することに他ならなかった。創意に富むエジプト人はその程度では満足せず、香料を用いて遺骸を保存する手法を編み出し、魂の帰還に備えた。だが、全ては空しく、風を捕らえるような愚行に過ぎなかった。カンピセスの手<sup>38)</sup>を免れ、時にさえ黙認されてきたエジプトのミイラは、今や食欲の餌食と成り果ててしまった。ミイラは商品となり、ミツライムは傷<sup>39)</sup>

薬とされ、ファラオは防腐剤として売られているのである。

個々の人間が不死を、あるいは忘却から免れ、月の下にあるこの世に残り続けることを願っても、それは空しい。人々はまた、太陽の上の領域においても妄想を抱き、天空にその名を残すべく、あれこれ知恵を絞ってきた。これまでも、さまざまに天空図にさまざまな名を持つ星座が記入されては、次から次へと変更が行なわれてきている。その結果、ニムロドはオリオン座に、オシリスは狼座に飲み込まれてしまった。天空に不変不朽を求めたところで、大地と同様、本体は不変であっても、細部は変わり得ることを思い知るのみである。天空については、彗星や新星の他に、望遠鏡が物語を語り始めている。パエトンと同じ宿命を担いつつ、太陽の回りをさまざまに点などが、その実例となるであろう。

不死性以外には、厳密な意味で不滅なものはありません。始まりのないものだけが終わりのないことを確信出来る。他の全ては何かに依存した存在であり、破滅の及ぶ範囲にある。不死性とは、自らを破壊し得ないという、根源的存在の特性であり、自らの力も及ばぬほどに強固である全能者の崇高な属性に他ならない。だが、キリスト教の説く永遠の概念は十全であり、あらゆる地上の栄光を空しくしている。何らかの形で死後の世界がある以上、死後に名声を残そうとするのは愚かなことである。私たちの魂を破壊すると共に、復活を保証する唯一の存在である神は、私たちの肉体や名前が長く残ることを直接には約束なさっていない。即ち、余りに大胆な期待を抱いたところで、不幸にも挫かれる事態は十分にあり得るのだ。また、長くその名を留めるといっても、単に忘却を免れることに過

ぎないのではないか。とはいえ、人間は高貴な動物であり、灰となつてもその輝きを失わず、墓に入ったとしても莊嚴なのである。誕生と死は共に輝かしく嚴肅であり、人間はたとえその本性に恥ずべき点があろうと、雄々しさを發揮する機会を欠くものではあり得ない。生命は清らかな炎であり、私たちは目に見えない内なる太陽によつて生かされている。人生にはささやかな火で十分である。しかしながら、死後には、どんなに盛大な炎でささげ物足りなく思われたらしく、徒に高価な薪が用いられ、あたかもサルグナパルスのように焼かれることが好まれたのであった。だが、用ひにまつわる賢明な法律は贅沢な炎を愚かなことと判断し、嚴肅な葬儀の慣習にふさわしい控え目なものに改めさせている。その結果、どんなに貧しくとも、薪、泣き女、ピッチ、それに骨壺を用意出来ない者は殆どいなくなつたといふ。

五種類の言語を用いても、ゴルデアアーヌスの墓碑銘は長くは残らなかつた。神の僕モーセに墓はなかつたが、その名前は墓を持つ誰よりも長く残っている。彼は天使により人知れず埋葬され、忘れ去られるよう宣告を受けたが、人々が発見する手掛かりを与えられていなかつたわけではない。エノクとエリヤは墓もなく埋葬も行なわれない異例の形を取りながら、長く人々の記憶に生き続けている。みごとな実例である。嚴密に言えば、彼らは死んだのではなく、この世という舞台において、後にある役を果たすことになつている。最後の審判の下される世界の終末において、私たちが死滅するのではなく、翻訳された神のことばにある通り、何か他の存在に変えられるのならば、最後の日に墓が作られることは殆どない。少なくとも

ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

も、永遠に埋葬されるよりも前に死者は速やかに復活するであらうし、完全に閉ざされる前に開かれる墓もあるに違いない。ラザロでさえ、奇跡ではなくなるであらう。死を恐れていた多くの者が一度しか死ねないと呻くような陰惨な事態こそ、第二の死であり、生きながらの死なのである。そのとき、生が呪われた者たちに絶望を投げ掛け、人々は、墓ではなく山に覆われることを願ひ、消滅を求めらるであらう。

墓に執着した者がいた一方で、敢えて墓を拒否した者もいた。中には、自らの墓の存在を人目にさらしたくないという強情を空しく押し通す者もいた。その点、アラリクスは非常に巧妙であつたらしく、川の進路を変えさせ、川底に自分の遺骨を隠している。骨壺の中でなら安全だと考えたシラですら、復讐を込めたことばと石が自らの墓に投げられるのを防ぎ得なかつた。穏やかに暮らし、汚れない生涯を過ごした者は幸せである。この世で人とそのような態度で接した者は、死後の世界で誰に会おうと何の恐れも抱く必要がない。亡くなつた際にも、死者の間で騒ぎを引き起こすこともなく、イヤから嘲りの歌を受けることもない。

ピラミッド、アーチ、それに方尖塔は虚栄の途方もない現われに過ぎず、古の莊嚴さが著しく度を越したものに過ぎない。だが、最も崇高な答はキリスト教のうちに見出される。キリスト教は高慢な思いを踏み付け、野心の首を押さえつつ、無謬なる永遠を謙虚に追い求めている。永遠を前にしては、あらゆるものが矮小で、余りにも惨めに頼りなく見えてしまふに違いない。

将来に思いを馳せ、恍惚と日々を過ごしてきた敬虔な心の持ち主

ハイドリオタファイア（その二）（生田省悟・宮本正秀）

は、予め定められていた混沌という前世の闇に密かに横たわっていたおりも、前世以上に現世を重んじることはなかった。幸運にも、キリスト教で言う死、恍惚、魂の解放と変容、神の接吻、神の味わい、あるいは聖なる影への参入を真に理解した者がいるとすれば、彼らは既に天をはっきりと予感したことになる。彼らにとつては、この世の栄光は確実に終わりを告げ、灰となった大地が後に残されるに過ぎない。

墓に入つて後代に残ること、何かを造り上げて名を残すこと、名前のみが伝えられること、あるいはキメラのごとく伝説として生きること、これらは古の人々を大いに慰めるもので、彼らにとつての至福の一部を成していた。だが、真の信仰の原理に照らしてみれば、全ては空しくなつてしまふ。真に生きることは、自分自身に再び復帰することであり、それこそが高貴な信仰を持つ者の希望であり、その証でもある。聖イノケンティウスの教会墓地に横たわろうと、エジプトの砂漠に横たわろうと変わりはしない。永遠の存在となることに恍惚となれば、どのような処遇を受けたところで構いはしない。六フィートの地中に葬られようと、ハドリアヌス帝の墓廟に納められようと、いずれも本望なのである。

ルカーヌス

・・・亡骸が朽ちようと

焼かれようと、構いはしない・・・

(59)

## 註

## 第四章

- (1) 第一章で述べられているような、諸民族の野蛮な吊いの慣習を指すものであろう。
- (2) 『レビ記』四・一二。
- (3) 『コリント前書』六・一九。
- (4) 『ギリシャ正教の葬儀において』(B)。
- (5) 『デモクリトスがもう一度復活すると約束したのも、やはり空しいことである。彼自身、復活などしていない。死によって生命が更新されるなどというのは、なんと愚かなことか(プリニウス『博物誌』七・五五』(B)。欄外註には、当該のラテン語が引かれている。
- (6) 『私たちは、死者の亡骸が土から光へと戻ることを望む(グノーマイ』一〇三―四』(B)。欄外註には、当該のギリシャ語が引かれている。
- (7) 『土より来るものは土に帰る』事物の本性について』二九九―一〇〇〇』(B)。欄外註には、当該のラテン語が引かれている。なお、『伝道の書』の一節とは、一一・七を指している。
- (8) 『バイドロス』二四六。
- (9) 該当箇所は『オデュッセイア』一一・二二二。
- (10) 該当箇所は『ヘルモティムス』七。
- (11) 『プラトン』『バイドン』一一五e』(B)。
- (12) デイオゲネース・ラエルティウス六・七九。
- (13) ブラウンは、いわゆる『プラトンの歳月』を踏まえている。これは、『テイマイオス』三九、『国家』五六四b等で示されたように、数千年の周期を経て万物は元の状態に帰るといふ説である。なお、『医師の信仰』一・六にも、『プラトンの歳月』への言及が見受けられる。

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- (14) 「さらば、さらば、さらば、我らも自然の許す順に、汝に続かん」(B)。欄外註には、当該のラテン語が引かれている。
- (15) マクロビウス『スピキオの夢』一・二二では、蟹座と山羊座はそれぞれ、天の出口と入り口とされている。
- (16) 「我が盞を苦しめることなかれ」(B)。出典はティブルス一・一・六七。
- (17) デイオゲネース・ラエルティウス六・三二―二。
- (18) 「ロシア人など」(B)。
- (19) 「少なくとも、生者の目と異なるために」(B)。
- (20) 『フランチェスコ・ベルツチによる』(B)。
- (21) スエトニウス『ウェスパシアヌス伝』一九・二。
- (22) 『ヘロドトス』五・九二。
- (23) 『オデュッセイア』一一・二二五。
- (24) 同書一一・九〇。欄外註には、当該の「テーバイのテイレシアースの魂が黄金の笏を手に」という、女性名詞である *θηλυκῆς* の用いられた一節がギリシャ語で引かれている。だが、本文の記述に対して、ブラウンがなぜこのような欄外註を付したかは不明である。
- (25) 「ルーキアーノスにおいて」(B)。出典は『冥府旅行記』。
- (26) 運命の三女神の一人で、命の糸を断ち切るとされている。ギリシャでは、アトロポスと呼ばれていた。
- (27) 『オデュッセイア』一一・九五―九など。なお、血を命の在りかとするのは、『レビ記』一七・一一、一四による。
- (28) 同書二四・六―九。
- (29) 同書一一・六〇五。
- (30) タンテ『地獄篇』一〇・九七―一〇八。
- (31) 『オデュッセイア』一一・四四三―六一。
- (32) 同書一一・四八―五〇。
- (33) 『アイネーイス』六・二九〇―四。

ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- (34) 同書六・八二六―七。  
 (35) 『オデュッセイア』一・五四三―六四。  
 (36) 『アイネーイス』六・四九四―七。  
 (37) 『カロン』という対話篇において、カロンは、地上に生きる人間の栄光の空しさを嘲っている。  
 (38) 『オデュッセイア』一一・四八五―九一。  
 (39) 同書六〇―四。  
 (40) ホラティウス『頌歌』一・一二・四六―八。  
 (41) 『アイネーイス』六・八二六。  
 (42) 『イーリアス』二三・一〇三―四。  
 (43) プラトン『国家』七・五一―四。  
 (44) 『地獄篇』四(B)。  
 (45) 『煉獄篇』一・三一。  
 (46) マキャベリ『講話集』二・二。  
 (47) 古代ローマの劇場で、舞台前方に設営されていた半円形の貴賓席。  
 (48) 『地獄篇』一〇・一三、五。  
 (49) 『神曲』において、煉獄に置かれた人々を指す。  
 (50) 『バイドン』の記述による。  
 (51) プルタルコス『小カト』六八・二、七〇・一。

## 第五章

- (1) 『創世記』五・二七で、九六九年生きたとされている人物。  
 (2) つまり、アングロサクソン人、デーン人、ノルマン人による征服のことを指している。献辞及び第二章で示された通り、ブラウンは、出土した遺骨がローマ人ないしローマ化されたブリトン人のものであるという前提に立っている。

- (3) 『ティブルス』三・二・二六(B)。  
 (4) 『セルルス及びブレトン』註解による『神託の奇跡』(B)。  
 (5) その著作『アレナリウス』において、アルキメデースは全宇宙の砂粒を算出したという。  
 (6) 『モーセの祈禱において』(B)。該当箇所は『詩篇』九〇・一〇。  
 (7) 『右手の小指を曲げて百を表わしたという、手を用いた古代の計算方法による。ヒエリウス『ヒエログリフ』参照』(B)。  
 (8) 『サムエル後書』八・二。  
 (9) 『列王紀略上』一一・一一八。  
 (10) 『三倍の長さを持つ夜』(B)。ゼウスは、アルクメーネーとの情交を楽しむために、夜の長さを三倍に引き延ばしたという。出典は、ルーキアーノス『神々の対話』一四・一〇。  
 (11) 『ヨブ記』三・一一―六。  
 (12) 『テイベリウスが文法学者に課した難問(スエトニウス『テイベリウス伝』七〇)(B)。  
 (13) 『ホメーロス』(B)。欄外註には当該のギリシャ語(『オデュッセイア』一〇・五二六)が引かれている。  
 (14) 『ヨブ記』三・一三一―五(B)。  
 (15) ブラウンは、世界が紀元前四千年に創造され、紀元後二千年まで続くという、伝統的な考えに則っている(『ヨハネ黙示録』二〇・一―七等を参照)。従って、『時の歩みの中間点』とは紀元前一千年を指すことになる。なお、世界が六千年続くという考え(次註参照)は、ブラウンの他の作品でも何度か披露されている。  
 (16) 『世界は僅か六千年しか続かないであろう』(B)。  
 (17) 千五百年に生まれたシャルル五世には、世界の終わりまで五百年しか残されていないかったことになる。  
 (18) 『かの名高い王(シャルル五世)以前に、ヘクトールの名声は、メトセラ

- の生涯の二倍以上もの長きにわたり続いていた」(B)。
- (19) プラウンは、主の祈りにおける「御国が来んことを」という一節を踏まえている。
- (20) 「死を表わす文字θ」(B)。言うまでもなく、θは*thanatos*の頭文字である。
- (21) 「古い骸は掘り起こされ、新たに別の亡骸がその下に埋葬される」(B)。
- (22) 「グルテルス」『古代碑文集』(B)。
- (23) 「ミイラは諸国で見世物となり、好き勝手な名前が付けられている。中には、ヘロドトスに記された古代エジプト王の名前を付けられたものさえある」(B)。
- (24) 「私は、自らの存在を知られたいと思うが、人となりについてまでは知られたくない(カルグーノ『自伝』九)(B)。欄外註には、当該のラテン語が引かれている。なお、この一節は、セネカ『利益論』七・一九を踏まえたものである。
- (25) ヒポクラテスの著述には、患者名の記されたものがあるらしい。
- (26) ホメーロス『イリアス』一六・一四九―五二。
- (27) 『マタイ福音書』一五・二二―二八。
- (28) 同書一四・三一―一、『マルコ福音書』六・一七―二八。
- (29) 『マタイ福音書』二七・三二―四四、『ルカ福音書』二三・三二―四三。
- (30) プリニウス『博物誌』三六・二二では、その人物がケルシフロンであったとされている。
- (31) デイオン・カシウス六九・一〇・二。
- (32) ホラティウス『頌歌』四・九・二五―三〇。
- (33) 「大洪水以前の」(B)。「創世記」四、五章には、アダムからヤフトに至る二十七の名が記されている。
- (34) 『創世記』六・三には、神が人の寿命を百二十歳に定めたことが記されている。プラウンは、この一節を踏まえているのであろう。
- (35) 『エウリピデースの『ポリュイドス』』(B)。プラトン『ゴルギアス』四

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- 九二eに引用された、消失したエウリピデースの劇の一節によっている。
- (36) 「ユダヤ人の慣習による。彼らは、火を点した蠟燭を人の灰を入れた壺に納め、亡骸の傍らに置いたのである(モテーナのレオンの伝えるところ)」(B)。
- (37) オウィディウス『変身譚』六・三〇四―二二。
- (38) 『伝道の書』一・一四』(B)。欄外註には、当該のラテン語とギリシャ語が引かれている。
- (39) 紀元前六世紀にエジプトを征服したキュロス大王の息子。
- (40) ハムの息子で、エジプト人を表わすとされている(『創世記』一〇・六参照)。
- (41) アリストテレス『天体論』二・一。
- (42) 同書一・一一二。
- (43) 敵に包囲されたアッシリアの支配者サルダナパルスは、絶望の余り、全ての宝物、妻、女と共に我が身を焼いたという。出典はアテナエウス二・三八・五二九。
- (44) キケロ『法律』二・二三・五九。
- (45) 「その財産は、遺体を焼く薪とビッチ、葬列の先頭に立つ泣き女、それに骨壺をかううじて都合出来るものでしかなかった(グルテルス『古代碑文集』所収のルーフスとペロニカの碑文による)」(B)。
- (46) 「ゴルティアヌスの墓碑銘は、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、エジプト語、アラビア語によるものであったが、皇帝リキニウスによって削り取られた」(B)。
- (47) 『創世記』五・二四、『ユダの書』九。
- (48) 『列王紀略下』二・一一。
- (49) 『ヨハネ黙示録』一一・三。
- (50) 『コリント前書』一五・五一。
- (51) 『ヨハネ福音書』一一・一四四、一二・一一一八。

ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- (52) 『ヨハネ黙示録』二一・八。  
 (53) 同書六・一六。  
 (54) 「ヨルダンデース『ゴート人誌』による」(B)  
 (55) デイオン・カシウス七七(七八)・二三・七。  
 (56) 『イザヤ書』一四・四一―七」(B)。  
 (57) 「バリにある。そこでは、遺骸が直ちに消滅するという」(B)。  
 (58) 「ハドリアスによってローマに建立された堂々たる墓廟。現在は、サンタ  
 ンジェロ城が立っている」(B)。  
 (59) 『ファルサリア』七・八〇九―一〇。

### 訳出に当たって

ここに訳出した『ハイドリオタファイア』(Hydrionaphia)は、ノリッジの医師、サー・トマス・ブラウン(Sir Thomas Browne)が、近郊に出土した数十の骨壺に寄せて著したものである。「埋葬の壺に関する小論」と副題に謳われているものの、本書は骨壺とそこに納められた遺骨に検討を加えるだけのものではない。稀代の博識家として知られる著者ブラウンは、前半の三つの章では、甲いに關する古今の様々な事例を引き合いに出しつつ、死に対して様々な角度から考察を加え、後半の第四、五章においては、死に抗しようとする人々の試みの空しさを語り、キリスト教の復活の思想にその慰めを見出すに至っている。しかし本書の特徴は、その内容よりもむしろ著者の饒舌な語りにあるかも知れない。ある時は、微小な事象を詳述し、またある時は、崇高な思想を厳かに説く、その雄弁な語りこそが本書を際立たせたものにはないだろうか。また、古今の書物への頻繁な言及において発押されている、彼の博覧強記ぶりにも注目すべきであろう。

一六〇五年一月一九日、ロンドンに商人の子として生まれたブラウンは、一六一六年より、ウインチェスター・コレッジに学び、一六二三年、オックスフォードのプロウドゲイト・ホールに進んでいる。その著作に見られる夥しい言及から窺われる、彼の古典に関する広範な知識は、ここで培われたものである。一六二九年、修士号取得の後、医学に転じ、モンペリエ、パデュア、ライデンに遊学する。一六三三年、ライデンにおいて医学博士の学位を受け帰国した後、オックスフォードシャーにて、医師見習いとして勤め、一六三七年オックスフォードより医学博士の学位を受ける。その後ノリッジに居を定め、一六八二年、七十七歳の誕生日にこの世を去るまで、その地において医業に携わり続けている。

しかし今日では、彼の名は、医師としてではなく、その著作によって我々の知



るところとなっている。彼の最初の著作である、『医師の信仰』(Religio Medici)は、一六三五年ごろに書かれたものであり、一六四三年に正式な形で出版されている。ここに展開される、キリスト教に関する幅広い見識は、イタリヤ、フランス、オランダという異なった宗教的背景をもつ国々に学んだ際に育まれたものかも知れない。俗信の誤謬を指摘する大著『伝染病的誤謬』(Pseudodoxia Epidemica)は、一六四六年に初版が発表され、その後一六七二年の第六版に至るまで、改定増補が重ねられている。『ハイドリオタフィア』が、『キュロスの庭園』(The Garden of Gyns)との合本の形で刊行されたのは一六五八年のことであった。『キュロスの庭園』においてプラウンは、様々な事物に「五点型」を認め、その神秘的な意味を探っている。今日この二つの作品は、ミルトンの『快活なる人』(L'Allegro)と『沈思の人』(Il Penseroso)のような、対をなすものと見做されることが多い。また、死後においても、一六八三年の『雑纂』(Certain Miscellany Tract)、一六九〇年の『一友人への書簡』(A Letter to a Friend)、一七一六年の『キリスト教徒の道徳』(Christian Morals)等の著作が刊行されている。

(宮本 記)

私たちは、しばらく前からプラウンに関心を持ち始め、その作品を少しずつ読み続けている。とはいえ、難解極まりないことばと論理を前にして立ち止まることもしばしばで、作業は遅々として進まないのが現状だと言える。そこで私たちは、読みの能力と限界を検証する必要があると感じ、翻訳を試みることに決めた。翻訳によって、プラウン理解の大前提を形成し得ると確信したのである。まず取り組むべき作品として、私たちは『ハイドリオタフィア』を選んだ。一六五八年、生前最後に刊行されたこの作品(もともとプラウンは、それから二十四年後、七十七回目の誕生日当日に亡くなっている)には、プラウンの思想の少なくとも一端が現われていると思われ、分量から言って、これが私たちの能力に見合っていると軽率にも考えてしまったからであった。

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

当然ながら、『ハイドリオタフィア』には、“bizarre”(怪異な)とても訳すべからずと評されるプラウンの文体が遺憾なく発揮されているし、該博な知識に支えられた論議が展開されてもいる。原文の雰囲気や伝えることなど当初から放棄してはいいたもの、訳出の試み自体、文字通り試練の連続に他ならなかった。難解かつ不明の箇所を前に、断念するのが良策と感じられたのも再三のことであった。従って、敢えて今回提出した試みには多くの誤訳があるだろうことを、正直に告白しなければならない。ただ、恐らく本邦初訳と思われる私たちの作業が、さきやかではありながら一応の形を取ったことを喜びとしたいし、併せて誤解や誤読の類を教示して頂けたらと心から願っている。金沢大学教養部の平田恩氏には、幾つかの箇所でお世話になった。お礼申し上げたい。

本文中に頻出する固有名詞については、プラトンなど一部を除き、原名表記を心がけたが、遺漏のあるかもしれないことを断っておく。また、訳者の手許には一六八六年版の全集を始め、数種類のテキストがあるが、訳出に際しては、直接依拠したロビンズ編の他に主として、次の版を参照した。

The Works of Sir Thomas Browne, ed. Geoffrey Keynes(London: Faber & Gwyer; 1928-31), 6 vols. 原著に付された欄外註については、この版を利用した。

Sir Thomas Browne: Religio Medici and Other Works, ed. L. C. Martin(Oxford: Clarendon Press; 1963). 巻末の詳註からは、教えられるところが大きい。

Sir Thomas Browne: The Major Works, ed. C. A. Partridge(Harmondsworth: Penguin Bks; 1977). 註及び巻末の「人名小辞典」が有益。

(生田 記)